

人間教育専攻

臨床心理士養成コース

石 井 景 子

指導教員 久 米 禎 子

## 1 問題と目的

近年の社会環境や生活環境の急激な変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えており、いじめ、不登校、心身症、児童虐待、自然災害や事件事故発生時における心のケアなど、心の健康に関する問題が多様化・深刻化している（渡邊,2017）。そうした中で、2009年4月に施行された学校保健安全法では、養護教諭を中心として行う相談活動が明確に規定され、個々の心身の健康問題の解決に向けた養護教諭の役割がますます大きくなっている（文部科学省,2011）。

一方で、畑山(2010)は、養護教諭の職務ストレスと葛藤をライフヒストリー法によって分析し、保健室登校児の態度にストレスと葛藤が増大し、その結果追い詰められて退職を考えたという養護教諭の事例を示している。また、中澤・朝倉(2016)によると、養護教諭の仕事関連ストレスの一つとして「子供との人間関係の困難さ」が挙げられ、抑うつ反応と有意な関連があることが明らかにされている。これらのことから、養護教諭は児童生徒との関わりの中で、自分の中に生じる負の感情や、児童生徒との関係の困難さに追い詰められていると考えられる。これは、児童生徒と関わろうとするからこそ起こることであり、養護教諭は、児童生徒を支えたいという気持ちがありながらも、それができない葛藤を抱えているのではないだろうか。

養護教諭は児童生徒との関わりの中で追い詰められていることから、まずは自分と児童生徒との関係から距離をとり、客観的に振り返ることが必要であると考えられる。そのことを通して、自己理解や生徒理解が深まると、それまで抱えていた葛藤を少しでも和らげ、自分の感情や考えを認めた上で、児童生徒を理解し受容することができるようになるのではないだろうか。

養護教諭が児童生徒とのやりとりを振り返る取り組みとして、一般化されている手法は現在のところみられないが、看護の分野では、患者と看護師の相互作用過程を明らかにし、実践に役立たせるための学習ツールとして、プロセスレコードが用いられている。多久島ら(2015)によると、プロセスレコードを用いた事例検討会は、看護学生の自己理解と他者理解を深める教育方法として有効であることが示唆されている。また、留目(2013)は、養護教諭の教育実習生が健康相談場面をプロセスレコードによって省察することで、実習生の自己理解が促進されることを示している。児童生徒の心理相談場面も、プロセスレコードを用いた振り返りによって養護教諭の自己理解と生徒理解が促進されるのではないかと考えられるが、そこに着目した研究は行われていない。

そこで本研究では、養護教諭の自己理解と生徒理解を促進するための取り組みとして「プロセスレコード演習」を実践し、その効果を検証

する。本研究により「プロセスレコード演習」が養護教諭の自己理解と生徒理解を促進する研修方法として有効であるという結果が得られた際には、養護教諭の負担感軽減、生徒対応力の向上、養護教諭を対象とした研修方法の確立の一助となると考える。

## 2 方法

### (1) 対象

中学校に勤務するA・B・C3名の養護教諭

### (2) 方法

対象者に、生徒の心理的問題への個別対応で違和感や困難感を抱いた場面のプロセスレコードを作成することを依頼した。その後、作成したプロセスレコードをもとに、筆者と一対一で検討を行う振り返りワークを行った。なお、振り返りワークでは、【態度分析】【違和感の検討】【ロールプレイ】の3項目に取り組んだ。

以上の実践を月に一度のペースで3セット行った後、事後インタビュー調査を実施した。

## 3 結果と考察

### (1) 対象者の個人内変化

A 養護教諭:生徒の「心の方には入り込まない」と言い、一貫して生徒に教示的な関わりしていた。その背景には、生徒への「呆れ」や「自分の体を大事にして欲しい」という気持ちがあることが語られた。また、自分について「変わりようがない」「そういうパターンになってる」と言い、生徒対応や自分自身を見直す必要性を感じながらも、それができずにいる葛藤が感じられた。経験を重ねたA養護教諭にとって、生徒対応や自分について検討することは、これまで築き上げてきたものを否定してしまうかもしれない怖さがあったのではないかと考えられる。

B 養護教諭:生徒を理解し受容することを心がけながらも、「これでいいのか」という不安を抱

いていた。演習を通して、不安の背景には「すぐに答えてあげないといけない」という気持ちがあった」と気づき、生徒の話を聴くこと自体に意味があると再認識した。演習の中で不安を語り、筆者と共有できたことで、自分の感情や考え方を振り返ることができたと考えられる。

C 養護教諭:自分の対応を「グサッとくる」「一方的に指示してる」と感じ、生徒対応を改善することに取り組んだ。演習を通して、生徒との関わり中で生じる「傷付き」や「虚しさ」が語られた。演習3回目には、生徒を受け入れる対応を心がけた結果、生徒に裏切られたような気持ちを抱き、生徒を受け入れることに対して防衛的になったが、その背景にある「傷付き」や裏切られた気持ちについて検討することには至らなかった。自身の「傷付き」と向き合うことはC養護教諭にとって痛みを伴う作業であり、生徒に教示的に関わることで自分の感情と距離をとっていたのではないかと考えられる。

### (2) 演習の成果と今後の課題

「プロセスレコード演習」を通して、対象者全員が自分の気持ちと向き合い、その時の感情や生徒に対する率直な思いが語られた。また、演習をして良かったこととして、今後の対応の検討や、自分の対応の振り返りができたこと等が挙げられた。校内で一人であることが多い養護教諭にとって、自分の感情を語り生徒対応を検討することは、日頃抱えている不安や葛藤を他者と共有する機会となったと考えられる。

一方、自身の教示的な態度や、生徒の気持ちに気付いても、その背景には、自分自身や生徒対応を振り返る怖さや痛み、葛藤があることが分かった。本研究ではこの部分を受け取ることが不十分であり、対象者が抱える葛藤にも目を向け、共に理解を深めることが必要であった。